

報告

偶然の戦略

— ジャン・アルプ、エルズワース・ケリー、ロバート・ラウシェンバーグ、ゲルハルト・リヒターの事例をめぐって —

河本真理 (日本女子大学)

芸術創造に「偶然」を導入することは、何かを(綿密に)企図することを否定し、芸術家の「手」による完璧な技巧や、芸術家が自身の作品を完全にコントロールするという考えをも否定するものだ。芸術創造に偶然的な要素が作用することは、もちろん 20 世紀以前にもあったが、偶然が意識された方法や理論として、前面に打ち出されるのは 20 世紀になってからである。

20 世紀において、ルネサンス以降の合理性に基づいた絵画システムを問い直そうとしたダダイストやその系譜に連なる芸術家たちが、「偶然」を導入したのは、偶然ではない。ジャン・アルプは、チューリヒ・ダダ時代(1916-1919年)に「偶然の法則によって」配置されたコラージュを制作した。もっとも、偶然を導入することによって、芸術家のコントロールを緩めることはできるが、芸術家の意図や意識を完全に排除できないのは自明のことで、結局「偶然の法則」は「理論的虚構」であった。しかし、20 世紀美術は、芸術家の「手」による完璧な技巧やコントロール、そしてそれに結びついている「個性」の価値を部分的にせよ否定することによって、ルネサンス以来の絵画システムを問い直そうとしたのである。偶然は、アルプ自身もそう語ったように、無意識と結びつけられることが多いが、実際には、偶然を意識的に用いるというある種逆説的な戦略が取られた。アルプは、1930 年代にも偶然を用いてコラージュを制作している。

アルプに触発されたエルズワース・ケリーも、フランス時代(1948~1954年)に、「偶然によって」配置したコラージュを制作した。こうして「非個人的な芸術」を目指したケリーは、格子のシステムを用いることによって、いわば偶然をシステム化し、ケリーの芸術にとって根本的な、図と地のヒエラルキー的な関係を解消しようとした。

ロバート・ラウシェンバーグは、「ランダムな秩序」というコンセプトを 1963 年の同名のテキストにおいて打ち出す。強力に絶え間ない往来の騒音が暗示する「ランダムな秩序」は、アルプが見出そうとした偶然による神秘の啓示とも、目に見えるものを構成するために偶然を道具として使いこなそうとしたケリーの場合とも異なり、今日のテクノロジー化された現実における偶然の奔流と共鳴する。

本発表では最後に、1986 年以降、絵具を塗り重ねた幾つもの層を上からスクイージーで擦り落とす手法を用いて、抽象絵画を制作しているゲルハルト・リヒターの事例を、抽象絵画における偶然の導入と行為や生成のプロセスの重視という観点から再検討し、方法としての偶然とそのイデオロギー的な意義を明らかにする。